



University of Tehran press

## The errors of Persian language learners in using Japanese final particles “ne”, “yo” and “yone”



**Farzaneh Moradi\***

department of Japanese language and literature, University of Tehran, Tehran.Iran

Email: farzaneh.moradi@ut.ac.ir

0000-0002-2983-3589



**Fatemeh Mafakherian\*\***

Master of Japanese Language Teaching, University of Tehran Tehran, Iran

Email: Mafakherian.f@gmail.com

### ABSTRACT

In Japanese conversation, the grammatical final particles, “yo”, “ne” and “yone” play an important role. So far, a lot of research has been done in relation to their functions, and the mistakes that language learners face when using them. This current research, with the purpose of something clarifying Persian language learner’s blind spots in learning these three final particles, investigated their role and functions in the sentence, then analyzed the answers of a test related to these three final particles which were obtained from 116 Iranian language learners and Japanese speakers. we determined the errors of the language learners in three different categories. In connection with the final particle “yo”, the majority of errors were about recognizing the function of “drawing attention”, “requiring awareness and recognition”, “emphasizing the will and desire”, “expressing satisfaction and agreement” and “requesting correction”; while associate with the final particle “ne”, most of the problems occurred in recognizing the functions of “expressing agreement and consensus”, “self-emphasis” and “demanding apparent satisfaction” was the greatest problem and the utmost errors related to “yone” was recognizing “receiving confirmation for a presupposition” and “providing an explanation with the audience”. Afterward, the source of these errors has been investigated and divided into four propellants “lack of final particles modality functions recongnition”, “insufficient explanations in educational resources and errors caused by educational procedures”, “Multiple and similar functions of this final particles” and “The uniqueness of final particles features” which have been analyzed during this particle and then presented solutions for how to teach them.

DOI: 10.22059/JFLR.2023.352404.1002

### ARTICLE INFO

Article history:

Received: 13 December 2022

Accepted: 18 February 2023

Available online: winter 2022

### Keywords:

*Japanese language, final particles, language learners, Persian speakers, modality*



Moradi, F., & Mafakherian, F. (2023). The errors of Persian language learners in using Japanese final particles “ne”, “yo” and “yone. *Journal of Foreign Language Research*, 12 (4), 515-535.

\* She has published some papers in Japanese language teaching and analysis of Japanese language teaching resources in different journals.

\*\* Fatemeh Mafakherian Master of Japanese Language Teaching, University of Tehran Tehran, Iran

## ایران‌نویسان زبان‌آموزی که در استفاده از کلمات پایانی «یو، نه، یونه» در زبان‌های خارجی خطاها را بررسی می‌کنند

فرزانه مرادی\*

گروه آموزش زبان ژاپنی دانشکده زبانها و ادبیات خارجی دانشگاه تهران، تهران، ایران

Email: farzaneh.moradi@ut.ac.ir

0000-0002-2983-3589



فاطمه مفاخریان\*\*

گروه آموزش زبان ژاپنی، دانشکده زبانها و ادبیات خارجی دانشگاه تهران، تهران، ایران

Email: Mafakherian.f@gmail.com



### چکیده

در مکالمات روزمره، کلمات پایانی «یو»، «نه» و «یونه» نقش مهمی ایفا می‌کنند. با این حال، در زبان‌های خارجی، استفاده نادرست از این کلمات رایج است. این مقاله به بررسی خطاهای رایج در استفاده از کلمات پایانی «یو»، «نه» و «یونه» در زبان‌های خارجی می‌پردازد. برای این منظور، ۱۱۶ نفر از زبان‌آموزان ایرانی که در یک کلاس زبان ژاپنی در دانشگاه تهران شرکت می‌کنند، مورد آزمایش قرار گرفتند. نتایج نشان داد که بیشترین خطاها در استفاده از کلمات پایانی «یو» و «نه» رخ داده است. همچنین، نتایج نشان داد که زبان‌آموزان ایرانی در تشخیص تفاوت بین کلمات پایانی «یو» و «یونه» دچار مشکل هستند. این یافته‌ها می‌تواند به معلمان زبان‌آموزان ایرانی در تدریس این کلمات پایانی کمک کند.

### اطلاعات مقاله

تاریخ ارسال: ۱۴۰۱/۰۹/۲۲

تاریخ پذیرش: ۱۴۰۱/۱۱/۲۹

تاریخ انتشار: زمستان ۱۴۰۱

نوع مقاله: علمی پژوهشی

### کلید واژگان:

کلمات کلیدی: **زبان ژاپنی، کلمات پایانی، زبان‌آموزان ایرانی، خطاهای رایج، کلمات پایانی «یو»، «نه» و «یونه»**

شناسه دیجیتال DOI: 10.22059/JFLR.2023.352404.1002



مرادی، فرزانه و مفاخریان، فاطمه (۱۴۰۱). تحلیل خطاهای زبان‌آموزان فارسی زبان در هنگام کاربرد تکواژهای پایانی جمله «yo.ne» و «yone» در زبان ژاپنی. *پژوهش‌های زبان‌شناختی در زبان‌های خارجی*، ۱۲(۴)، ۵۱۵-۵۳۵.

Moradi, F., & Mafakherian, F. (2023). The errors of Persian language learners in using Japanese final particles “ne”, “yo” and “yone. *Journal of Foreign Language Research*, 12 (4), 515-535.

\*استادیار زبان و ادبیات ژاپنی، دانشکده زبانها و ادبیات خارجی دانشگاه تهران. انتشار مقالاتی در زمینه آموزش زبان ژاپنی و تحلیل منابع آموزشی زبان ژاپنی در مجلات

مختلف

\*\*کارشناسی ارشد آموزش زبان ژاپنی دانشگاه تهران.

## 1. 序論

日本語で流暢かつ自然な会話をするための重要な要素の一つは、終助詞を正しく使用することである。日本語の終助詞の中で、「よ」「ね」「よね」は、他の終助詞よりも日常会話でよく使用されており、日本語の会話における命題に対して、発話者の視点を表す役割を果たす要素となっている。しかしながら、終助詞が自然な日本語会話の中で、どのように、又、どの程度使用されているかを理解するのは外国人日本語学習者にとっては難しいものであり、また、これらの終助詞の機能は、同様で混同し易いため、従来の研究においても、日常会話で多用される終助詞「よ」、「ね」、「よね」は最も重要視されるものとなっている。

最近、イランではイラン人日本語学習者の日本語の使用状況に関する研究が行われた。例として、[Moghadam Kiya & Hosseini \(2019\)](#)の研究では、*評価の形態論の観点から*、日本語とペルシア語における増強過程の対照研究を行っている。他の研究では、[Moradi \(2019\)](#)は、イラン人学習者が日本語の受身文を学習する際の誤用分析を行っている。しかしながら、ペルシア語を母語とする日本語学習者に対する終助詞の習得状況、又は誤用分析については未だ研究が行われていない現状がある。

本研究では、終助詞「よ」「ね」「よね」の機能を考察しながら、次の質問に対する回答を探る。1. 終助詞「よ」「ね」「よね」の使用に関する、学習者の誤用はどの範囲で発生するのだろうか。2. ペルシア語を母語とする日本語学習者による終助詞「ね」「よ」「よね」

に関する誤用の原因はどういったものがあるのか。

[Yonezawa \(2005\)](#)によると、日本語学習者の発話における会話文に、終助詞の誤用及び過剰使用、または過小使用されることがしばしば見られるとあり、また、[Zheng \(2020\)](#)によれば、日本語学習者における終助詞の不適切な使用は、終助詞が文法的機能とともにモダリティ機能を併せ持っていることに起因する可能性が考えられるされている。さらに、[Saigo \(2012\)](#)においては、日本語教育に関する教材の中には、「ね」「よ」の意味機能に関する説明が不十分だという理由を述べている。ペルシア語を母語とする日本語学習者にとって、終助詞習得を困難なものとし、また、誤用の要因となっているものには上記同様の原因があるものとする。つまり、現在使用されている教材では、終助詞の機能などについての説明が提供されておらず、その結果、学習者の終助詞「よ」、「ね」、「よね」に関する認識が不十分なものとなり、自然な対話の中における終助詞の不適切な使用に結びついているものと思われる。

## 2. 先行研究

これまで、日本語教育における終助詞とその機能が重視され、それに関して、数多くの研究が行われてきた。[Yamada \(2006\)](#)はまず、「よ」という終助詞の用法を考察し、そのモダリティ機能による用法を「注意喚起用法」、「認識要求用法」、「修正要求用法」に分けている。次に、テストを実施することで、中国語学習者による「よ」の使用状況を調査し、多くの中国語学習者がそれを「注意喚起」という機能と認識し、その使用を間違えているという結論に達した。最後に、

日本での生活を経験した学習者のテスト結果と、中国でのみ日本語を学習した学習者のテスト結果を比較し、後者のグループは終助詞「よ」を使用する傾向が少ないと述べている。

他の研究では、[Lee \(2001\)](#) はまず、「よ」、「ね」、「よね」のコミュニケーション機能を分析し、意見が対立する議論の場において、下降イントネーションを伴う「よ」を用いて自分の意見を述べることは、明確な立場表明を助ける。そして、上昇イントネーションを伴う「よ」や「ね」「よね」を用いる意志表示は、一方的な立場表明になるのを避け、相手に配慮しながら押し付けがましくない立場表明を助けると述べている。次に、自分の立場表明を行う際に現れる「ね」「よ」「よね」の機能別の出現状況から、日本語母語話者と韓国人学習者を比較し、立場表明を助ける「ね」と「よ」の使用においては、日本語母語話者と韓国人学習者の間に相違点が見られなかった。これに対し、立場表明を助ける「よね」の使用においては、多少の違いが見られたと述べている。Leeによれば、立場表明を助ける「よね」の場合、日本語母語話者は自分の主張を支持する事実を述べる時は勿論、自分の立場表明文にも多く「よね」を用いているのに対し、韓国人学習者は殆ど自分の主張を支持する事実を用い、自分の立場表明文に「よね」を使っている発話は一例しかないとしている。

前述のように、日本語の会話においては、終助詞、特に「よ」「ね」「よね」が重要な役割を果たしている。なぜなら、終助詞はモダリティ機能もあり、会話の内容と命題に対する発話者の視点を表す要素であるからである。[Zheng \(2020\)](#) によれば、Masuoka (

2007) は、文の意味的構成は「事態を表す領域」と「話し手(表現者)の態度を表す領域」という二つの領域からなると述べ、後者を「モダリティ」と定義している。本節では、この観点から「よ」「ね」「よね」の機能を検討した[Yamada \(2006\)](#)、[Xiong \(2010\)](#)、[Zheng \(2020\)](#) などの研究を考察する。

## 1- 終助詞「よ」の機能

### A: 注意喚起

[Moriyama et al. \(2002\)](#) は、「注意喚起」は「よ」の最も一般的な機能であると考えられる。また、[Yamada \(2006\)](#) は、「認識要求」と「修正要求」を「よ」の他の二つの機能だと考えている。例として、

- ・ あ、携帯が落ちそうですよ。

### B: 認識要求

この用法が二つの場面で使用される。一つは、聞き手が話し手の認識している情報を要求する場合であり、(1の例)もう一つは、話し手が聞き手に認識してない発話内容を提供したい場合であると考えられる(2の例)。

1. A: 大阪はどんな所ですか。

B: とても住みやすい所ですよ。

2. 心配しないで。私はいつもあなたのそばにいるよ。

### C: 修正要求

[Yamada \(2006\)](#) によれば、話し手は発話する際、既に聞き手は自らと異なる認識を持っていることを確認し、またはその異なる認識や態度を修正すべきであると感じている場合、終助詞「よ」が使用される。その例は以下の通りである。

A: 私は最近、めっちゃ太ってきたねー？

B: そうかな？そんなことないよ！

前者によれば、このような機能は発話によって「修正の強制」、「非難」、「命令の強制」のニュアンスもある。

#### D: 同意表明

「よ」に対するこのような用法は [Members of Descriptive study of Japanese grammar Study Group \(2003\)](#) によれば、話し手が相手からの依頼を受け入れることを表す「いいです」に接続される「よ」である。同者によると、この使用は必須であり、上昇イントネーションによって、相手の心理的負担を軽くするようなニュアンスが示されるのが一般的である。

A: 先生、気持ちが悪いです、早く帰ってもいいですか。

B: ええ、いいですよ。お大事に。

#### E: 独り言

同グループが分析しているのように、終助詞には対話的な性質を強く持つものと非対話的な性質を強く持つものがあるが、「よ」及び「ね」は対話的な性質、すなわち聞き手目当ての性質を強く持つもので、一般的に対話的な終助詞は聞き手の存在する対話で用いられるものであり、独話や心内発話として用いられることはない。一方、「よ」に対する「独り言」という機能は聞き手と関係がなく、話し手が独りで命題を言う場合に入れると [Han & Ichinose \(2011\)](#) は述べている。次の例を見ると分かるように、このような状況では話し手の意志が強くなることを表すと考えられる。

A: ここは最近、インスタグラムで本当に有名になったところですよ。

B: そうそう。絶対来たいと思ってたんです。せっかくテヘランへ来て、

ここを見ないで帰ることはできませんよ。

## 2- 終助詞「ね」の機能

[Xiong \(2010\)](#) は「ね」の用法を会話の情報源は話し手か、聞き手の方から提供されるかによって次のようにまとめている。

#### A: 聞き手情報

● **確認**：「聞き手情報」の場合、聞き手は確かな情報を持っているが、話し手は不確かな情報しか持っていない。このように、話し手は「ね」の使用によって、聞き手に情報を確認し、不確かな情報を確かな情報にしようとする。

A: 息子さんがもう高校生ですね。

B: はい、そうです。

#### B: 共有情報

「共有情報」は、話し手が聞き手と情報を共有しており、両者とも確かな情報を持っている。さらに、同者はこの状態に対する用法を三つの「同意要求」、「注目表示」、「同意表明」に分類している。

● **同意要求**：前者が指摘しているように、客観的な事実について話し手と聞き手が同じ情報、判断を共有していることを互いに確かめ合う場合、「ね」が使用される。話し手は「ね」の使用によって、聞き手に同意や共感を求めるため、この場合の「ね」は「同意要求」の発話機能を果たす。

A：今日は寒いですね。

B：そうですね。

● **注目表示**：同者によると、日本語では聞き手の領域に属するものについて述べる際に、話し手が「ね」を使わず、自分の判断をそのまま述べると相手の領域を侵害してしまうことになるが、「ね」を使うと自分の判断を押しつける印象が軽減し、相手に配慮している印象を与えている。

A：明日から夜10時まで勉強しないと。

B：えー、それは大変ですね。

● **同意表明**：「同意表明」の「ね」は、相手の意見や考えに賛成する際に使用され、「そうですね」、「いいですね」などのような定型的な表現でもよく出現することが多い。この「ね」の用法も必須である。

A：今日は寒いですね。

B：そうですね。

### C: 話し手情報

情報の持ち主が「話し手情報」である場合、「ね」の使用は任意である。[Xiong \(2010\)](#) は「話し手情報」を二つの聞き手の意向を考慮するという「見せかけの同意要求」機能と聞き手の意向を考慮しないという「自己確認」及び「回想」機能に分け、さらに「見せかけの同意要求」を三つの「行為要求」、「意志表示」、「応答」に分類している。

#### 1. 見せかけの同意要求

● **「行為要求」の場合に用いられる「ね」**：このような「ね」は働きかけや勧めのような「行為要求」の文に使用されることによって、話し手は聞き手から同意を得られることを期待する印象を与え、要求の働きかけを軽減させる。

例) 明日の試験、頑張ってね。

● **「意志表示」の場合に用いられる「ね」**：自分の行動を宣言する場合も、相手の共感を求める形で「ね」を使うことがあり、このように、話し手と聞き手との間に話題への一体化・共有化が生じることが図られる。

A：これ、めっちゃ美味しい！

B：じゃ、私も試してみますね。いただきます。

● **「応答」の場合に用いられる「ね」**：前者が説明しているように、応答の場合に使用される「ね」は特定の疑問文に対する応答文の中でも用いられるが、それは学習者にとって理解しにくい用法であるため、「ね」の使用が聞き手に配慮する機能を果たすというコミュニケーション機能から説明する必要がある。従って、このコミュニケーション機能を最も理解しやすくするため、同者はこのような用法を「情報が聞き手側に属す場面」、「情報が話し手と聞き手のどちらの領域にも属さない場面」、「話し手が自分側の情報を提供する場面」の場面に分類している。

#### 2. 「自己確認」と「回想」

「自己確認」と「回想」のどちらも、自分の頭の中で確かめてから聞き手に話し、聞き手に対する働きかけは弱い。また同者が [noda \(2002\)](#) から引用するように、「自己確認」とは「自分の結論との一致を示す」ことで、「回想」とは「自分の記憶との一致を示す」ことである。

A: この漢字の読み方は何ですか。

B: これは「りかい」ですね。

#### 3- 終助詞「よね」の機能

Members of Descriptive study of Japanese grammar Study Group (2003) は「よね」の機能を

情報の持ち主を基に「共有情報」、「話しての情報」、「聞き手の情報」に分けている。

#### A: 共有情報

- **同意を見込まれる用法**：両方の聞き手と話し手は情報の持ち主で、述語の内容を経験しているが、その経験に対して話し手は聞き手に同意を求めると考えられる。

例) 昨日のパーティーは楽しかったよね。

#### B: 話し手情報

- **説明しようとする態度を明示する用法**：この場合、話し手は聞き手に対して説明し、かつ、その状況を共感してもらいたい文となるが、ここで注意しなければならないことは「のだ」を用いた文でない場合、「よね」の使用が不自然な言い方になると考えられる。

A: 一人で行くのは大丈夫ですか。

B: もうここの生活に慣れてきたんだ(のだ)よね。

#### C: 聞き手情報

- **見込みを前提として確認する用法**：この場合は、聞き手は情報の持ち主であり、聞き手は話し手より発話内容に対する情報を持っているため、話し手がその情報を話の相手と確認する。

A: 明日のパーティーに来るよね？

B: (明日のパーティーに) 来るね。

最初の文では、情報の持ち主は聞き手であり、話し手は自分の推測に対する聞き手の確認を受け取りたいと考えている。しかし、2番目の文では、話し手は情報の所有者であり、終助詞「ね」によって、聞き手に自分の思考と目的を知らせる。

### 3. 研究方法

この研究では、イラン人日本語学習者 59名(女性40名、男性19名、平均年齢23.97歳、日本での生活及び留學歷なし)及び日本語母語話者57名(女性37名、男性20名、平均年齢24.97歳)に参加してもらった。イラン人の日本語学習者59名の内訳として、51名についてはテヘラン大学の日本語学生、5名はテヘラン大学の公開語学講座の生徒であり、残る3名は独学により日本語を学んだ者となっている。日本人参加者は全員が日本の大学生である。(このテストは、日本の大学に留学しているテヘラン大学日本語学科卒業生の協力を得て、日本人参加者に配布した。)

本研究では、日本語学習歴1年以上の学習者(9名)を初級学習者、学習歴2年以上(19名)の者を初中級レベル、学習歴3年以上(17名)の者を初中級者・中級レベル、学習歴4年の学習者(15名)を中上級レベル、4年以上の学習者(8名)を上級レベルの学習者として選定した。使用された教材として、31名の学習者については「学ぼう日本語」シリーズ(初級~初中級編)が使用されており、25名の学習者については「みんなの日本語」シリーズ(初級編)が使われていた。なお残りの10名については他の教材の使用を確認している。

本研究は、グーグルドキュメントサイトを通じてテストを作成し、同サイトに参加者へ本テストリンクの配布・送信した後、得られた回答結果に基づき実施している。このテストは、AさんとBさんを仮名とする両名の短い会話文を用いた26の設問で、その会話内において53の空欄箇所を展開し、参加者には上記終助詞を使用して回答してもらうこととした。

このテスト調査に使用した文章や表現は、信頼性の高い文献・資料等から引用したものであり、テストにおいては短文形式の会話を使用した。また、文章の正確さを担保するため、2名のネイティブスピーカーによる文章校正を実施するほか、日本語学習者の誤用を正確に割り出すため、終助詞の各機能を含む文章を配置、使用した。テストの設問における機能の配分は、下表のとおりである。

**表1 アンケートの質問番号と終助詞の機能の配分**

「よね」の機能と質問番号	「ね」の機能と質問番号	「よ」の機能と質問番号
同意を見込まれ、要求する:10a, 1a1	確認: 1b,9a,15a	注意喚起 : 3a1,13a,20a,23b2
説明しようとする態度を明示する:10b2, 15b	同意要求: 5a,8a	認識要求 : 1a2,17a2,22a2,23b3,24b,23b3

見込みを前提として確認する:14a, 23a1, 26a1	注目表示: 4b	修正要求 : 5b,11b,18a1,19b
	同意表明: 3b,8b,12b1,26b	同意表明 : 7b,14b1,17b2,18b1, 21b
	見せかけの同意要求: 2b,6b,11a1,16a1, 16b,22a1	独り言 : 4a,8a2,10b1
	自己確認: 17a1, 17b1	
	回想: 12b	

テストのデータは統計的推論を基に、SPSS (version 25)ソフト (Statistical Package for the Social Sciences) を用いて分析した。このテスト結果を判定するため、有意確率 (P 値) と呼ばれる指標が使用されている。有意確率は、サンプルのデータにより計算される数値であり、その各値は平均からの標準偏差の値とイコールであり、それより大きい値はエラーを示す。統計的推論により、イラン人日本語学習者と日本語母語話者の回答の差異を考察した。有意確率 (P 値) が有意水準の 0.05 より小さい場合、有意差が認められ (有意差あり)、二つの集団のペルシア語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者は、その問題における終助詞

の用法に対する認識が異なる。つまりペルシア語を母語とする日本語学習者の認識は不十分であると解釈することができる。一方、問題の有意確率（P値）が0.05 以上の場合、有意差が認められることはなく（有意差なし）、すなわち、その終助詞の用法に対して二つの集団の認識がほぼ同等であると解釈できる。

## 4. テスト結果

### 4.1「よ」に関する回答

テストより収集されたデータの結果から、「3a1、10b1」、また、「14b1、17a2、18a1、18b1、23b2」の問題では、イラン人と日本人の回答率が異なり、有意差が見られる。多くの日本人回答者はそれらの問題に対して終助詞「よ」を選択する傾向があったが、イラン人回答者はほとんどが「ね」又は「よね」を選ぶ傾向があるか、終助詞「よ」「ね」「よね」をほぼ同等に選択していた。

表2 3a1問の回答の記述統計

国籍		よ	ね	よね	どれも	有意水準
イラン人	人数	32	4	7	16	0.00 0
	選択率	54.2%	6.8%	11.9%	27.1%	
日本人	人数	53	2	0	2	
	選択率	93%	3.5%	0%	3.5%	

表3 10b1問の回答の記述統計

国籍		よ	ね	よね	どれも	有意水準

イラン人	人数	30	8	3	18	0.00 5
	選択率	50.8%	13.6%	5.1%	30.5%	
日本人	人数	34	0	10	13	
	選択率	59.6%	0%	17.5%	22.8%	

表4 問の回答の記述統計

国籍		よ	ね	よね	どれも	有意水準
イラン人	人数	15	28	6	10	0.00 0
	選択率	25.4%	47.5%	10.2%	16.9%	
日本人	人数	42	8	1	6	
	選択率	73.7%	14%	1.8%	10.5%	

表5 17a2問の回答の記述統計

国籍		よ	ね	よね	どれも	有意水準
イラン人	人数	17	9	9	24	0.00 1
	選択率	28.8%	15.3%	15.3%	40.7%	
日本人	人数	36	7	1	13	
	選択率	63.2%	12.3%	1.8%	22.8%	

表6 18a1問の回答の記述統計

国籍		よ	ね	よね	どれも	有意水準
イラン人	人数	21	22	7	0	0.004
	選択率	35.6%	37.3%	11.9%	0%	
日本人	人数	39	8	3	1	
	選択率	68.4%	14%	5.3%	1.8%	

表7 18b1問の回答の記述統計

国籍		よ	ね	よね	どれも	有意水準
イラン人	人数	32	1	17	0	0.000
	選択率	54.2%	1.7%	28.8%	0%	
日本人	人数	54	1	0	1	
	選択率	94.7%	1.8%	0%	1.8%	

表8 23b2問の回答の記述統計

国籍		よ	ね	よね	どれも	有意水準
イラン人	人数	19	1	11	23	0.003
	選択率	32.2%	1.7%	18.6%	39%	
日本人	人数	36	0	3	18	
	選択率	63.2%	0%	5.3%	31.6%	

#### 4.2「ね」に関する回答

終助詞「ね」に関する回答の分析に基づくと、問題「11a1、12b1、16a1、17a1」では

、イラン人と日本人の回答率に有意差が見られた。多くの日本人回答者は終助詞「ね」を選択する傾向があったが、多くのイラン人回答者は「よ」又は「よね」を選択していた。各終助詞の選択率は以下の表のとおりである。

表9 11a1問の回答の記述統計

国籍		よ	ね	よね	どれも	有意水準
イラン人	人数	23	19	5	12	0.000
	選択率	39%	32.2%	8.5%	20.3%	
日本人	人数	7	44	2	4	
	選択率	12.3%	77.2%	3.5%	7%	

表10 12b1問の回答の記述統計

国籍		よ	ね	よね	どれも	有意水準
イラン人	人数	11	42	3	3	0.003
	選択率	18.6%	71.2%	5.1%	5.1%	
日本人	人数	0	54	2	1	
	選択率	0%	94.7%	3.5%	1.8%	

表11 16a1問の回答の記述統計

国籍		よ	ね	よね	どれも	有意水準
----	--	---	---	----	-----	------

イラン人	人数	25	15	6	13	0.00 0
	選択率	42.4%	25.4%	10.2%	22%	
日本人	人数	18	34	0	5	
	選択率	31.6%	59.6%	0%	8.8%	

表12 17a1問の回答の記述統計

国籍		よ	ね	よね	どれも	有意水準
イラン人	人数	24	11	4	20	0.00 1
	選択率	40.7%	18.6%	6.8%	33.9%	
日本人	人数	9	29	6	13	
	選択率	15.8%	50.9%	10.5%	22.8%	

#### 4.3「よね」に関する回答

終助詞「よね」に関する回答の分析では、イラン人と日本人の回答率は異なるものとなっており、有意差が見られる問題は「15b1、26a1」であった。各終助詞の選択率は以下の表のとおりである。

表13 15b1問の回答の記述統計

国籍		よ	ね	よね	どれも	有意水準
イラン人	人数	33	7	2	17	0.00 0
	選択率	55.9%	11.9%	3.4%	28.8%	

日本人	人数	17	0	25	15
	選択率	29.8%	0%	43.9%	26.3%

表14 26a1問の回答の記述統計

国籍		よ	ね	よね	どれも	有意水準
イラン人	人数	14	21	22	2	0.00 1
	選択率	23.7%	35.6%	37.3%	3.4%	
日本人	人数	3	10	42	2	
	選択率	5.3%	17.5%	73.7%	3.5%	

## 5. 分析と考察

### 5.1「よ」に関する誤用

#### A: 注意喚起の「よ」

問題「3a1」の「財布が落ちそうです . . . 」という文章では、日本語母語話者の終助詞「よ」に対する回答率は93%を超えているが、イラン人の回答率は54.2%に満たないものとなっている。次に、問題「23 b 2」の「A: 旅行の費用は50万円です。十分ですか。B: 十分だと思います...」の場合、ほとんどの日本語母語話者は聞き手の注意喚起の「よ」を選択したが、多くのイラン人日本語学習者は「ね」を選択した。 [Members of Descriptive study of Japanese grammar Study Group \(2003\)](#) は例を挙げ、この「よ」の機能を次のように説明している。地面に落ちた財布を見たとき。このような場合は、聞き手に向かって、「あ、財布が落ちている」という文章

を使用できる。しかし、財布の持ち主が聞き手であったら、文末には「よ」の使用が必要である。すなわち、話し手が聞き手に関連する情報を認識し、聞き手がそれに気付いていないと予測する場合、終助詞「よ」を使用する必要があり、使用しない場合は文章が不自然になる。

### B: 認識要求の「よ」

問題「17a2」の「どこか食べに行こう...」という文章には、ほとんどの日本語母語話者は認識要求の「よ」を選択したが、イラン人日本語学習者は「—」を選択していた。

[Yamada \(2006\)](#) によれば、話し手は、聞き手が自分の発話の内容について情報も持っていないことを知っている場合、文末に「よ」を使用し、発話の内容を聞き手に知らせる。前述の文では、動詞の「意向形」が使用されており、相手に何かをすることに参加するよう提案し、招待するために使用される。このように、「意向形」の文に接続する認識要求の「よ」の用法がイラン人日本語学習者に対して不明確なものとなっていると推察できる。

### C: 意志を強調する「よ」

問題「10b1」では、「絶対来たいと思っていただきます...」という文章が使用されている。[Han & ichinose \(2011\)](#) によると、「よ」の一つの機能は「話し手の意志と欲求の強調」ということである。上記の文の文頭では、命題の事実性を強くする「絶対」という副詞が現れるため、意志を強調する「よ」が適切であると思われる。しかし、収集したデータによると、「ね」を選択した日本語母語話者は0%であったが、「ね」を選択したイラン人日本語学習者は13.6%に上った。

### D: 同意表明の「よ」

問題「18b1」では「わかった、いい...」という表現が使われ、適切な回答は同意表明の「よ」となる。「よ」を選択した日本語母語話者は94.7%であるのに対して、「よ」を選択したイラン人回答者は54.2%であった。また、問題「14b1」の「そうなんです...」の場合も、73.7%の日本人は同意表明の「よ」を選択したが、47.5%のイラン人回答者が「ね」を選択し、25.4%は「よ」を選択していた。[Members of Descriptive study of Japanese grammar Study Group \(2003\)](#) のによると、「わかった」と「そうなんです...」という表現は相手の要求を認めるということを明確に表しており、他の選択肢よりも「よ」が適しているとしている。

### E: 修正要求の「よ」

問題「18a1」の「今度、私も連れて行って...」では、日本人の68.4%は「命令の強制」を表す「よ」を選択したが、イラン人回答者の35.6%は「よ」、37.3%は「ね」を選択した。前述の[Yamada \(2006\)](#) によれば、この「よ」の機能が、発話によって「修正の強制」、「非難」、「命令の強制」のニュアンスを持つとしていることから、この選択率からはイラン人回答者が「命令の強制」を表す「よ」の使用に関して十分に理解していないということが分かる。

## 5.2 「ね」に関する誤用

### A: 同意表明の「ね」

問題「12b1」の「それはいいです...」では、94.7%の日本語母語話者が「同意表明」である「ね」を回答しており、「よ」に対する回答

率は0%であった。それに対して、18.6%のイラン人は適切ではない終助詞「よ」を選択していた。[Xiong \(2010\)](#) は、相手の意見や考えに賛同する際、「ね」を使用しないと発話は不自然になるとしている。つまり、イラン人回答者の中には、命題に対する話し手の認識状態の重要性を把握してない人が少なくないと思われる。

### B: 見せかけの同意要求「ね」

問題「11a1」の「病院に行こう...」の場合、聞き手が子供であるため、77.2%の日本人は発話を優しくする「行為要求」の「ね」を選択した。前者は、話し手は聞き手に自らの働きかけを進め、また期待といった「行為要求」を命令形や禁止形で表すが、「ね」によって、その強さがより柔らかくなるとしている。この短い会話では相手は子供であるので、「ね」を選択した理由は子供に対する口調を和らげるためである。しかしながら、イラン人日本語学習者の39%は「よ」を選択していた。つまり、「よ」により発話が強くなるということを、イラン人日本語学習者が理解していない、あるいは認識自体が不足しているということが推察できる。その一方、「16a1」の「ちょっと郵便局まで行ってくる...」という問題では、59.6%の日本人は「意志表示」の「ね」を選択したが、イラン人回答者は42.4%の選択は「よ」であった。

### C: 自己確認の「ね」

問題「17a1」において、「おなかが空(す)いた...」という文章がある。前者によれば、この文章では話し手は自分自身に重点を置いており、聞き手の意図は考慮されない。この設問に対する日本人の50.9%、そして、イラン人の18.6%が「自己確認」の「ね」を選択していることから、多くのイラン人日

本語学習者が「ね」の「自己確認」を完全に理解してないものと解釈できる。

## 5.3「よね」に関する誤用

### A: 説明しようとする態度を明示する「よね」

問題「15b1」の「弟とけんかしたんだ...」では43.9%の日本人は「よね」を選択したが、「よね」を選択したイラン人日本語学習者はわずか3.4%である。前述したようなXiongの見解から、このような文章では、「のだ」文ではない場合、「よね」の使用は不自然な言い方になると考えられている。

### B: 見込みを前提として確認する「よね」

問題「26a1」では「彼は去年のパーティーにも来なかった...」という文章が使用されている。前述の[Members of Descriptive study of Japanese grammar Study Group \(2003\)](#)の定義によれば、この文章では、話し手は「彼は去年のパーティーに来ていない」ということを認識していたが、それについて詳しい情報を持っている相手に確認を求めている。「よね」を選択した日本語母語話者は73%を超えているが、イラン人回答者の35.6%が「ね」、37.3%が「よね」を選択していた。

## 6 . 誤用の要因

[Keshavarz \(2009\)](#) は外国語学習者の誤用の主な原因を、1.母語の干渉から生じる二言語間の相違に基づくエラー、2.国語内のエラー及びその学習者の言語発生上のエラー、3.教師や特定の教材、シラバスの配列、教授法などにより誘発されたエラー、4.言語学習ストラテジー、5.コミュニケーションストラテジーという5種類のエラーに分類している。ケシャーヴァルズによれば、

母語の干渉から生じる二言語間の相違に基づくエラーは、母国語の音声的、構造的、語彙的、意味的、文法的及び文体的要素が目標言語に転移する結果であり、国語内のエラーは、目標言語での負の転移と干渉の結果であるとなっている。第二言語を学習する最初の段階では、言語間転移がより多く発生するが、学習者が新しい言語のシステムの様々な部分を学習すると、言語内転移がより多くなる。前者によると、三つ目のグループのエラーは誘発エラーであり、教材や教師が採用した教授法から発生する。四つ目のエラーの原因は言語学習ストラテジーであり、過剰一般化と母国語のルールの転移は、二つのタイプの学習ストラテジーである。もう1つのタイプは、簡素化であり、学習者が目標言語をより単純なシステムに縮小するために使用するストラテジーである。エラーの五つ目の原因はコミュニケーションストラテジーであり、学習者がメッセージ伝達を増やすために使用する方法である。以下では、ケシャーヴァルズの分類に基づいて、イラン人日本語学習者の終助詞の誤用の要因について考察を行う。

## 6.1 終助詞のモダリティ機能の認識不足

モダリティには、様々な下位分類があり、その一つは「対話態度のモダリティ」である。「対話態度のモダリティ」は対話文専用の形式であり、これに属する終助詞も「対話的な性格」を持っている。終助詞は聞き手に対する「情報提示を調整する」機能を担っている。例えば、命令形としての「来て」に「よ」を付けて発話すると、単なる「来てほしい」という情報の他に、催促や注意などの話し手の態度が新しい情報として聞き手に伝達される。したがって、前者の

観点に基づくと、イラン人日本語学習者の誤用の原因は、終助詞のこの特徴と、それに関する知識の欠如、そして目標言語内での干渉によるものであるといえる。

## 6.2 教材における説明不足及び教授法による誤用

前述したように、三つ目のグループのエラーは誘発エラーである。つまり、教材や教師が採用した教授法から発生するものである。イラン人日本語学習者の誤用発生のもう一つの理由は使用される教材に関連しており、終助詞の機能に関する説明が提供されていないことであると考えられる。本節では、「よ」、「ね」及び「よね」の終助詞が、イラン人日本語学習者に対して使用される『みんなの日本語』と『まなぼう日本語』という教材の初級編において、どのように扱われているかを考察する。

表15 『みんなの日本語初級1, 2』及び『まなぼう日本語初級1, 2』『まなぼう日本語初中級』における

終助詞「よ」、「ね」、「よね」の使用率

教材	「よ」の使用数	「ね」の使用数	「よね」の使用数	合計
みんなの日本語初級1	25	74	0	99
みんなの日本語初級2	102	173	0	275
まなぼう日本語初級1	75	106	1	182
まなぼう日本語初級2	168	151	7	326

まなぼう日本語初級	81	74	6	161
-----------	----	----	---	-----

上記の表によると、『みんなの日本語』の入門書の2巻では、終助詞「よね」は一度も使用されていない。他の二つの終助詞に関しては、これらの教材で使用されているが、その使用法や機能、またその類似点や相違点に関する説明は確認することができず、『まなぼう日本語』の初級の2巻と初中級編もまた同様の状況であった。各終助詞、特に「よ」と「ね」に関しては、使用頻度が高いにもかかわらず、使用方法、類似点や相互点(すべての機能を含む)についての説明は見当たらなかった。つまり、使用されている教材のアプローチ方法に準じているためか、日本語教師からは十分な終助詞の指導及び使用方法、またこれに係る説明といったものがなされていないと考えられる。

### 6.3 終助詞の複数の類似した機能

前述のとおり、「よ」には、「注意喚起」、「認識要求」、「修正要求」、「同意表明」、「独り言」、「ね」には、「確認」、「同意要求」、「注目表示」、「同意表明」、「見せかけの同意要求」、「自己確認」と「回想」、「よね」には、「同意を見込まれる用法」、「説明使用とする態度を明示する用法」と「見込みを前提として確認する」という機能がある。機能の多様性と終助詞間の微妙な違いに対する認識の欠如は、言語内伝達の起源を持つ誤用の別の原因になる可能性があるのではないかと思われる。

### 6.4 日本語の終助詞の特徴、独自性

国語内エラーのカテゴリに含めることができるもう一つの要因は、日本語の終助詞の独自性である。[Moriya \(2006\)](#)は、日本語

の終助詞には、同様の特徴を持つ他の言語にはめったに見られない独自の特徴を持っていると述べている。ペルシア語においても、いくつかの場合を除き、これら終助詞に相当するものを見つけることは困難である。したがって、日本語の終助詞は言語学習者にとっては新しいカテゴリーとなり、そのほとんどが学習と使用の場において課題に直面することとなる。

## 7. 結論

本研究結果の分析から明らかになったように、ペルシア語を母語とする日本語学習者には、終助詞「よ」に関しては、「注意喚起」、「認識の要求」、「意志を強調する」、「同意表明」、「修正要求」、「ね」に関しては、「同意表明」、「見せかけの同意要求」及び「自己確認」、「よね」に関しては、「説明使用とする態度を明示する」と「見込みを前提として確認する」という機能に関する認識の誤用が多く見られた。また、[Keshavarz \(2009\)](#)の指標に基づいて、イラン人日本語学習者の誤用の原因について分析を行い、その結果においては「終助詞のモダリティ機能の認識不足」、「教材における終助詞の説明が提供されないこと及び教授法による誤用」、「終助詞の複数の類似した機能」、「日本語の終助詞の特徴の独自性」といったものが、誤りを生じさせる主たるものであることが明らかとなった。

これらの誤用を解決するには、終助詞の教え方に対してもっと注意を払う必要がある。終助詞を自然かつ適切に使用できるようになるためには、終助詞の特徴だけでなく、日本語における社会言語学を把握することも必要不可欠であると考えられる。もちろん、終助詞を適切かつ自然に使用するためには、文法的な特徴や機能を認識するほ

か、モダリティ機能や日本語の社会学を知る必要がある。なぜなら、日本語における各終助詞の使用は、話し手の状態、又は、その発話状態などによって異なるからである。特に、微妙な相違点がある終助詞「よ」「ね」「よね」の自然な使用要件は、その時々の発話状態や発話者次第であることから、それを日本人母語話者と同様に理解し、そして用いることは外国人日本語学習者にとっては非常に困難なことであると思われる。

従って、終助詞の用法を教示する際、そのすべての機能を完全に把握させるためには、通常の方法、つまり、一般的な用法を幾つかの例文で個別に説明するのではなく、「よ」「ね」「よね」の全ての機能を軸とする様々な発話状態を考慮しながら例文を設定

していかなければならない。そして、終助詞が自然に用いられる発話状態の場合において、各々の「よ」「ね」「よね」が付加する発話の特徴を比較し、加えて、それぞれのニュアンスを明らかにしていく必要がある。そのため、「よ」「ね」「よね」に対する各機能のイントネーションの特徴及び意味合いが適切に把握され、またそれらが定着されるようにしていくためには、今後、授業の中において、ラジオやテレビ、ドラマ、映画、アニメなどといった媒体を教材として積極的に利用し、またその教材を基に会話練習を行っていくことが非常に効果的なものとなると考える。

#### 参考文献

- Han, B. & Ichinose, T. (2011). A Study on Correspondence between Japanese Final Particles and Chinese modal particles -Take the final particles "yo", "ne" and "yone" in Japanese textbooks as an example-. Miyagi University of Education. Research Center for Education in International Understanding, 7, pp. 53-72.
- Keshavarz, M. (2009). Errors Analysis. Samt Press.
- Lee, S. (2006). The Final particles "ne", "yo" and "yone" in Japanese discussions: Differences between Japanese native speakers and Korean learners. *Studia linguistica*, 14, pp. 41-71.
- Manabō Nihongo: Textbook Ad hoc for Japanese Language Education (2005). Vol. 1-3, Tokyo: Senmon Kyouiku Publishing Co Ltd.
- Members of Descriptive study of Japanese grammar Study Group. (2003). Modern Japanese Grammar 4 Part 8 Modality. Descriptive study of Japanese grammar Study Group (ed.): Kuroshio Press.
- Minnano Nihongo; Japanese for All (1998). Vol 1-2, Tokyo: Surienetwork Publishing.
- Moghadam Kiya, R. & Hosseini, A. (2020). A comparative study of augmentation processes in Persian and Japanese Languages Based on the Theory of Evaluative Morphology. *Journal of Foreign Language Research*, 10 (2), 434-447.
- Moradi, F. (2020). An Analysis of Errors Committed by Iranian Language Learners of Japanese language in the Usage of Passive Form in Japanese. *Journal of Foreign Language Research*, 10 (2), 422-433.
- Moriya, M. (2006). Usage of Japanese Discourse Tags from the Viewpoint of Cognitive Linguistics. *Studies in Japanese language and Japanese literature 1*, 16, pp. 19-32.
- Moriyama, T. & Nitta, Y. & Kudou, H. & Masao, T. (ed.). (2001). Modality [Japanese Grammar 3]. Iwanami Shoten Press.
- Murayama, Y. (1993). Co-occurrence of sentence-final particles. *Information and Communication Studies*, 14, pp.27-33.
- Saigo, H. (2012). A study on the utterance chain effect of final particles "ne", "yo" and "yone":

- Based on discourse completion task results -  
*Kansai University Japanese Language and Culture Program Preparatory Course Papers in Teaching Japanese as a Foreign Language*, 22, pp.97-118

Xiong, Y. (2010). The Function and Chinese Translation of the Sentence-final Particle NE Appeared in the Japanese Language Textbooks for Elementary Level. *Studies in Japanese Language and Japanese Language Teaching*, pp.207-226.

Yamada, K. (2006). A Study in the Use of Sentence Final Particle “Yo” by Chinese Speaking Learners-From the Comparative Study on Sentence Final Particle in Japanese and Chinese. *Waseda journal of Japanese applied linguistics*, 8, pp.123-135.

Yonezawa, M. (2005). Study of Frequency and Gender in the Use of Sentence-Final Particles in some. *Bulletin of Center for Japanese Language Doshisha University*, 5, pp. 49-60.

Zheng, Ei. (2020). An Overview of Studies of Japanese Sentence Final Particles and Research on Acquisition of Those Particles by Learners of Japanese. *Global studies*, 4, pp. 93-112.